

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目】 【国語教育専攻】

解答上の注意

一、国語教育専攻の入学試験問題は、「専門科目・選択」（配点60％）と「専門科目・共通」（配点40％）に分かれています。

①「専門科目・選択」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（選択一～選択七）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・選択」で 解答すべき問題
国語科教育研究指導	幸田 国広	選択一 国語教育
日本語学研究指導	松本 正恵	選択二 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	松本 直樹	選択三 古典文学 I 上代文学
国文学研究指導	新美 哲彦	選択四 古典文学 II 中古文学
国文学研究指導	福家 俊幸	選択五 古典文学 III 中世文学
国文学研究指導	田淵 句美子	選択六 中国古典文学
国文学研究指導	内山 精也	
国文学研究指導	堀 誠	
国文学研究指導	石原 千秋	
国文学研究指導	金井 景子	選択七 近代文学
国文学研究指導	五味淵 典嗣	
国文学研究指導	和田 敦彦	

②「専門科目・共通」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（共通A～Dのいずれか一問）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・共通」で 解答すべき問題
日本語学研究指導	松本 正恵	共通A 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	内山 精也	共通B 中国古典文学
国文学研究指導	石原 千秋	共通C 近代文学
国文学研究指導	五味淵 典嗣	共通D 近代文学

二、解答用紙は、「問題番号」ごとに一枚使用すること。全ての解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名、ならびに「問題番号」（例「選択八」・「共通A」など）を必ず記入すること。

三、解答用紙のホッチキスは、はずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。

四、問題用紙は「十五枚」（本ページ含む）、解答用紙は「二枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

「選択一」 国語教育

一、次のA～Hのうちから三題を選び、それぞれ簡潔に説明しなさい（※解答に際しては選択した問題記号を明記すること）。

- | | |
|----------------|-----------------|
| A 生活綴方教育 | B 言葉による見方・考え方 |
| C 雑誌『教育・国語教育』 | D 大村はま |
| E 情報の扱い方に関する事項 | F カリキュラム・マネジメント |
| G 「サクラ」読本 | H 指導と評価の一体化 |

二、次のI～Nのうちから二題を選び、具体的に解説しなさい（※解答に際しては選択した問題記号を明記すること）。

- | |
|------------------------------------|
| I 森岡健二の「文章構成法」 |
| J 総合的な探究の時間と国語科の役割 |
| K PISA型読解力の特徴 |
| L 一読総合法と三読法 |
| M 文部省著作教科書『中等国語』（昭和三二年）における漢文の位置付け |
| N 時枝誠記の古典教育論 |

三、「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平成三二年三月二九日 初等中等局長）に基づき、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する際のポイントについて、中学校「B書くこと」領域の具体的な単元事例を挙げて説明しなさい。

なお、評価の観点としては、必ず「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を設定すること。

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

〔選択二〕 日本語学

一 次のA～Lの事項のうちから四題を選び、説明しなさい。（解答の際には、選択した問題番号を明記すること。）

A	ファイラー	B	シソーラス	C	サジェストペディア
D	授受表現	E	言語地理学	F	日葡辞書
G	複合辞	H	プロミネンス	I	上代特殊仮名遣い
J	時枝誠記	K	デイスコース	L	生成文法

二 次のM～Oのうちから一題を選び、具体的に論じなさい。（解答の際には、選択した問題番号を明記すること。）

- M 日本語史の時代区分とそれぞれの時代の日本語学的な特徴
N 現代敬語の五分類について
O 日本語における「文法化」現象

三 日本語学が研究対象としている範囲・分野について、専門外の人にもわかりやすいように、具体例を交えながら説明しなさい。その際、研究方法や隣接領域にも触れ、日本語学研究の意義が明確になるように論じなさい。

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

〔選択三〕 古典文学（I） 上代文学問題

一、次の（A）～（D）のうちから、二題を選択して論述しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- （A）『古事記』偽書説
- （B）『先代旧事本紀』の主題と構成
- （C）「山川原野名号所由」
- （D）発生期の和歌

二、次の（E）～（K）のうちから、三題を選択して簡潔に（一題あたり解答用紙五行以内）説明しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- | | | | |
|------------|----------|-------------|------------|
| （E）メルシナ型神話 | （F）出雲臣廣嶋 | （G）大伴旅人 | （H）『万葉集』巻一 |
| （I）貴種流離譚 | （J）行路死人歌 | （K）『播磨国風土記』 | |

三、上代文学作品の享受の歴史を踏まえ、その国語科教材としての意義について、具体的かつ簡潔に（解答用紙一〇行以内）考えを述べなさい。

（上代文学問題 以上）

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

「選択 四」 古典文学(Ⅱ) 中古文学

解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次の(A)～(D)のうち、二題を選択して論述せよ。

- (A) 『伊勢物語』と『古今和歌集』との関係
- (B) 『和泉式部日記』の特質
- (C) 『源氏物語』の古注釈
- (D) 『源氏物語』の諸本研究の意義

二、次の(E)～(M)のうち三題を選択して、簡潔に説明せよ。

- (E) 『大和物語』 (F) 『成尋阿闍梨母集』 (G) 『夜の寝覚』
- (H) 『栄花物語』 (I) 『讀岐典侍日記』 (J) 『堤中納言物語』
- (K) 藤原彰子 (L) 草子地
- (M) 平安時代の文学における後宮

三、中古文学を学校教育で学ぶ意義とは何か、あなたの考えを述べよ。

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択五〕 古典文学 (Ⅲ) 中世文学

一、次の①～⑥の中から二題を選択して、詳しく論述しなさい。

- ① 『堀河百首』の和歌史的意義について
- ② 歌合の文学史的展開について
- ③ 勅撰和歌集とその周縁について
- ④ 歌学書・歌論書の成立と展開について
- ⑤ 教訓書・女訓書の特質と受容について
- ⑥ 両統迭立と文学について

二、次の①～⑩の中から三題を選択して、簡潔に説明しなさい。

- ① 藤原俊成
- ② 方丈記
- ③ 古事談
- ④ 建礼門院右京大夫集
- ⑤ 今物語
- ⑥ 阿仏尼
- ⑦ 玉葉和歌集
- ⑧ 弁内侍日記
- ⑨ 夫木和歌抄
- ⑩ 徒然草

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

〔選択六〕 中国古典文学 問題

〔一〕 次の文は唐・韓愈の「送孟東野序」である。この文を読んで、設問に答えなさい。

① 大凡物不得其平則鳴。草木之無聲、風撓之鳴。水之無聲、風蕩之鳴。其躍也或激之、其趨也或梗之、其沸也或炙之。金石之無聲、或擊之鳴。人之於言也亦然、有不得已者而後言。其歌也有思、其哭也有懷、凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎。樂也者、鬱于中而泄于外者也。擇其善鳴者而假之鳴。金・石・絲・竹・匏・土・革・木八者、物之善鳴者也。維天之於時也亦然、擇其善鳴者而假之鳴。是故以鳥鳴春、以雷鳴夏、以蟲鳴秋、以風鳴冬。四時之相推敘、其必有不得其平者乎。……中略……唐之有天下、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀、皆以其所能鳴。其存而在下者、孟郊東野、始以其詩鳴。其高出魏晉、不懈而及於古、其他浸淫乎漢氏矣。從吾遊者、李翱・張籍其尤也。三子者之鳴、信善矣。抑不知天將和其聲而使鳴國家之盛邪、抑將窮餓其身、思愁其心腸而使自鳴其不幸邪。三子者之命、則懸乎天矣。其在上也奚以喜、其在下也奚以悲。東野之役於江南也、有若不得釋然者、故吾道其命於天者以解之。

〔設問一〕 傍線①「大凡……後言」を、口語訳しなさい。

〔設問二〕 傍線②「陳子昂……李觀」の中から一人を選び、その人物の文学史的功績について簡潔に説明しなさい。

〔設問三〕 傍線③「抑不……幸邪」について、(A)・(B)二つの問いに答えなさい。

- (A) すべて平仮名による書き下し文、または現代中国語の発音記号(拼音)表記に改めよ。
(B) 口語訳しなさい。

〔二〕 次のア～オの中から一つを選択し、その記号を解答欄に記した上で、説明ならびにあなたの考えを記しなさい。

- ア 「文言」と「白話」がもつ文学史的意味について
イ 白居易と「新樂府」について
ウ 中国文学の女性詩人について
エ 日中比較文学の研究方法について
オ 日本漢詩文がもつ国語教材としての意味について

〔三〕 次の(A)～(J)の中から三つの項目を選び、それぞれの文学史ないしは文化史的意味を中心に説明しなさい。

- (A) 風・雅・頌 (B) 六書 (C) 「典論論文」 (D) 「李娃伝」
(E) 王孟韋柳 (F) 黃庭堅 (G) 陸游 (H) 「聊齋志異」
(I) 「文鏡秘府論」 (J) 李攀龍『唐詩選』

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

「選択七 近代文学」

一 日本の近代文学研究における作者について、あなたの考えを述べなさい。

二 次の(A)～(E)の中から一題を選択して論じなさい。

- (A) 戯作文学について
- (B) 没理想論争について
- (C) 白樺派の文学について
- (D) 近代文学と病について
- (E) ジェンダーと文学研究について

三 次の(A)～(G)の中から三題を選択して説明しなさい。

(一) は作品名、『』は雑誌名を示す

- | | | |
|-------------|------------|------------|
| (A) 『我楽多文庫』 | (B) 「田舎教師」 | (C) 平塚らいてう |
| (D) 「蔵の中」 | (E) 『種蒔く人』 | (F) 「野火」 |
| (G) 火野葦平 | | |

①

3. 第三形容詞論を進めたところに何が見えるか

3.1 日本語の形容詞は少ないか

従来からしばしば、日本語には形容詞が少ないと指摘されてきた(谷崎(1934)、柳田(1936))。玉村文郎氏は、表1のような統計を発表している(玉村(1985))。

表1 基本語中の形容詞の数と百分率

		語 数	形容詞数	%
英 語		1,500	240	16.0
ドイツ 語		1,533	230	15.0
フランス語		1,515	253	16.7
中 国 語		3,000	437	14.6
日 本 語	雑誌 90 種	1,220	48	3.93
	分類語彙表	32,600	590	1.81
	同上中心語彙	7,000	176	2.51

(玉村(1985)による)

表1は、英語・ドイツ語・フランス語・中国語および日本語の基本語彙中における形容詞の全語彙に占める割合をあらわしたものである。日本語における「雑誌90種」は国立国語研究所がおこなった90種類の雑誌の語彙調査のことを、また「分類語彙表」は同研究所から出ている意味分類体の語彙表を意味する。日本語を除く諸言語では、形容詞の全語彙に対する割合が15%前後であるのに対して、日本語のそれは3.93~1.81%と極めて少ない。

ところで、「真ッ赤-な」「平ら-な」「優秀-な」「急速-な」といった単語は、伝統的な国文法などで「形容動詞」という名称で独立の品詞としてあつかわれてきた。しかし、これらの単語は、意味論的にも文法論的にも「赤-い」「ひらた-い」「すばら-い」「はや-い」のような狭義の形容詞と一致しているという認識から、今日では形容詞のひとつのタイプとみなす立場がますますつまる。いわゆる「形容動詞」と「形容詞」の違いは、語形だけであり、これは動詞における一段動詞と五段動詞の違いに相当するものである。語形は異なるものの、語形変化のシステムは共通している。狭義の形容詞を第一形容詞、いわゆる「形容動詞」を第二形容詞と呼ぶことにする。表2は、玉村文郎氏が「形容詞」と「形容動詞」をあわせて、形容語として、その形容語の全語彙に占める割合をしめしたものである。その結果は、5.45~6.24%であり、英語をはじめとする諸言語にくらべて、形容詞類が少ないことが指摘されている。

②

表2 基本語中の形容語の数と百分率

	語数 a	形容詞数 b	形容動詞数 c	形容語数 b+c	$(b+c)/a$ $\times 100$ (%)
雑誌90種	1,220	48	18.5	66.5	5.45
分類語彙表	32,200	590	1,242	1,832	5.62
同上中心語彙	7,000	176	261	437	6.24

(玉村(1985)による)

このような表を見る限り、日本語の形容詞は確かに少ないと言えそうである。しかし、わたしは「日本語の形容詞が少ない」という説に、以下のような二つの点で疑問を抱いている。ひとつは、派生形容詞について考慮されていないことであり、他のひとつは従来の文法書や辞書類で名詞のようにあつかわれている単語群に形容詞とみべき単語が多く存在していることである。前者については、ここでふれる余裕がない。

3.2 第三形容詞の存在

これまで一般に(たとえば辞書において)名詞と考えられていたものに、その統語的な特性から形容詞とみなすべき単語群が少なからず存在することがわかってきた。「丸ばち-」「黒ずくめ-」「汗まみれ-」「丸腰-」「底なし-」「横殴り-」「温室育ち-」「詐欺まがい-」「見ず知らず-」「抜群-」「真紅-」といった単語である。これらの単語には、以下のような特徴がみられる。

- (1) 主語や目的語にならないか、なりにくい。
- (2) 連体装飾をうけない。
- (3) 後続の名詞を装飾する規定用法(「どんな」に対応する属性規定)としてもちいられる。
- (4) 述語としてもちいられる
- (5) 後続の動詞(ときに形容詞)を修飾する修飾用法としてもちいられる。

以上の(1)(2)の特徴は名詞の特徴をもたないことを意味する。(3)(4)(5)の特徴は、形容詞の特徴である(ただし、形容詞に属するすべての単語が、三つの用法をそなえているわけではない)。

<中略>

〔共通A〕 日本語学(含日本語教育) 松木正恵

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
〔専門科目・共通〕 〔国語教育専攻〕

次の文章は、村木新次郎『語彙論と文法論』(二〇一九年十月 ひとし書房)の第十二章「日本語文法への疑問―活用・ヴォイス・形容詞―」第3節「第三形容詞論を進めたところに何が見えるか」から引用したものである。(一部省略した箇所がある。横書きの本文を、①~④の順に読みなさい。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。)

3

「抜群」は主語や目的語にならない。名詞の文法的な特徴である格のシステムをもたないものである。そして、連体修飾をうけることもない。つまり、この単語は、名詞ではなく、形容詞とみるのが正当である。わたしは、「抜群」のような、規定用法で語尾の「-の」をとるタイプの単語を第三形容詞と呼んだ(村木(2000)(2002)など)。

この第三形容詞に属する単語は少数にとどまらない。とりわけ漢語に多い。また、和語でも「人泣かせ-」「太っ腹-」「引っ張りだこ-」「泥だらけ-」「指折り-」「折り紙つき-」「的外れ-」「舌足らず-」など合成語に多い。漢語は名詞であるにとらえられる傾向があった(村木(2004)を参照)。また、合成語については、その内部構造に目がむけられることはあっても、できあがった全体の文法性に注目されることが少なかった。これらの単語は、なんらかの属性を意味し、形容詞としてふるまう。ちなみに、第一形容詞「すばらしい」の「-い」、第二形容詞「優秀-な」の「-な」、第三形容詞の「抜群-の」の「-の」は、いずれも形容詞の語尾である。

もっとも、「健康-」や「親切-」が名詞と第二形容詞とを兼務するように、名詞と第三形容詞を兼務する単語は存在する。たとえば、「みずからの浅学を 恥じる」「孤高を きわめる」の名詞用法と「浅学の 身」「孤高の 人」の形容詞用法のように。

ついでにいえば、形態的には動詞とのかかわりをもつ「とがった／とんがった」「角ばった」「のっぺり(と)した」「ざらざら(と)した」「ごわごわ(と)した」のような単語は、統語的な特性からみれば形容詞といってよく、第四形容詞と呼んでよいものである。『分類語彙表』や『類語大辞典』のような意味分類体の辞書には、このような単語を相類あるいは形容詞類として取り込んでいる。³⁾形式ではなく、意味から出発した単語の整理は、実は文法的にも正当に単語を分類しているのである。

このようにとらえると日本語の形容詞は、けっこうたくさんあるといえる。少なくとも、従来いわれたほど貧弱ではない。

3.3 品詞論のみなおし

わたしが第三形容詞とした単語群が名詞とされてきたのは、「-の」を介して後続の名詞につながるということからであろう。しかし、「-の」をしたがえるものが名詞であるとするのは、あまりにも形式主義とはいえないか。名詞にとっての本命は格の機能をそなえることであり、規定用法は副次的である。「彼の／パソコン操作の技術」と「抜群の 技術」では、後続の名詞を限定するという点が共通しても異なる規定であるといわなければならない。名詞による前者は $\langle \quad \times \quad \rangle$ のに対して、形容詞による後者は $\langle \quad \vee \quad \rangle$ 。単語の品詞性を問うとき、その単語が文中でどのようなはたらきをしているかを考慮しなければならない。

4

5 副詞は品詞論のはきだめだと、いわれてきた。しかし、わたしには「名詞」もゴミ捨て場のような役割をになっているのではないかと思える。辞書や文法書で名詞としてとりあつかわれてきた単語の中に、名詞らしくないものが多くふくまれているからである。第三形容詞は、そうしたもののひとつである。

さらに、「真っ先」「小走り」「真っ向」のような単語は、多くの辞書で名詞あつかいされているが、「真っ先に 性別を問う」「小走りに／で 横断する」「真っ向から 意見が対立する」のように、語形が固定し、もっぱら修飾成分としてもちいられる単語で、副詞としなければならないのではないか(「小走りを繰り返す」のように名詞としての使用も認められるが、それはまれである)。

また、以下のような「かたわら」や「拍子(に)」は名詞の格機能をうしない(語形が固定化し)、先行の節をうけ、後続の節につながるという時間的、文脈的な意味を獲得している。一種の文法化で、名詞ばなれをおこし、従属接続詞として機能している(村木(2005))。

(9) 作業場にたてこもって、注文の鳥籠や茶器をつくるかたわら、手ヒマをかけてつくったこの竹人形は、見事な出来栄えといえた。(『雁の寺』)

(10) 結願の当日岩殿の前に、二人が法施を手向けていると、山風が木々を煽った拍子に、椿の葉が二枚こぼれて来た。(『羅生門』)

日本語の品詞体系は、確立しているとはいいがたく、多くの問題をかかえている(影(2003)を参照)。品詞は単語の文法的な特徴(とりわけ統語論的な特徴)にもとづく分類であり、それを徹底させた分類がなされなければならない。

参考文献

- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』、むぎ書房
- 鈴木重幸(1983)「品詞をめぐって」、『教育国語』62 むぎ書房
- 谷崎潤一郎(1934)『文章読本』中央公論社
- 玉村文郎(1985)「形容語の世界」『日本語学』43 明治書院
- 影広隆(2003)「日本語教育における新しい文法体系の構築のために―用言の活用を中心に」『国文学 解釈と鑑賞』68-7 至文堂
- 村木新次郎(2000)「「がらあき-」「ひとかど-」は名詞か、形容詞か」『国語学 研究』39 東北大学
- 村木新次郎(2002c)「第三形容詞とその形態論」『国語論究 10 現代日本語の文法研究』明治書院
- 村木新次郎(2004)「漢語の品詞性を再考する」『同志社女子大学日本語日本文学』16
- 村木新次郎(2005)「(とき)をあらわす従属接続詞」『学術研究年報』55 同志社女子大学
- 柳田國男(1936)『新語篇』刀江書院

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】 【国語教育専攻】

問1 下線部1「動詞における一段動詞と五段動詞の違い」とあるが、両者の違いについて、語形変化のシステムの点から説明しなさい。

問2 下線部2「英語をはじめとする諸言語にくらべて、形容詞類が少ない」とあるが、英語の形容詞と日本語の形容詞では、そもそも文法的な機能に大きな違いがある。日英語の具体例を挙げて説明しなさい。

問3 で囲んだ(1)～(5)の特徴について、「抜群」を例として用いた短文を考えながら、それぞれの特徴を具体的に説明しなさい。その際、(3)～(5)は成立する例を、(1)・(2)は成立しない例(非文「*」を付す)を作って説明すること。

問4 下線部3「形式ではなく、意味から出発した単語の整理は、実は文法的にも正当に単語を分類している」とあるように、筆者は意味重視の品詞分類を目指している。従来の品詞分類は、橋本進吉に代表される形式重視の分類が主流となっている。橋本の品詞分類の基準は「形態」「機能」「接続」である。それぞれについて、橋本は具体的にどのような基準をもとに品詞分類を行っているのか、説明しなさい。(例えば、「名詞」と「動詞」は何を基準に区別されるのか、「名詞」と「副詞」の区別はどうか、など。)

問5 下線部4「名詞にとつての本命は格の機能をそなえること」とあるが、ここで言う「格」とは何が説明しなさい。その際、一般に「格」とは、述語を中心とした文中の要素間の関係を示す形式で、それを標示しているのは日本語では格助詞である、という見方とは異なる立場である点が明らかになるように記述しなさい。

問6 括弧へXへYへに、それぞれ「前者」「後者」についての特徴説明を入れなさい。(単語、もしくは短文で入れること。)

問7 下線部5「副詞は品詞論のはきだめだ」と言われてきたのはなぜか。具体例を挙げて説明しなさい。

問8 下線部6「一種の文法化で、名詞はなれをおこし、従属接続詞として機能している」表現の例を、本文の例以外に3つ挙げなさい。

以上

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科 修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

〔共通B〕 中国古典文学（内山精也）

次の文章（吉川幸次郎『宋詩概説』『詩の歴史における宋詩の意義』）を読み、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、一部原文を省略したり、表記を改めた箇所がある。

宋詩は、唐詩のみならず、ひろく従来の詩に比して、新しい詩である。宋詩のごとく、叙述し、議論し、生活に密着し、連帯感からの批判を示す詩は、これまでにない。

しかもまたそれは、従来の詩がはらんできた可能性、いつかは現実になるべき可能性を、実は大きく現実にしたものといえる。叙述、議論、生活への密着、連帯感が、唐詩でも、すでに杜甫、韓愈、白居易の詩として、内包されていたことは、すでにあちこちでふれた。宋詩は一見、唐詩と対蹠的に見え、また事実そうでもあるけれど、その意味では唐詩の延長なのである。またもつとも古くは「詩経」が抒情的な民謡の巻である「風」と、政治批判の巻である「雅」とを、あわせもつことは、周知のごとくである。唐詩がより多く「A」の子孫とすれば、宋詩はより多く「B」の子孫なのである。

それはまた宋の詩人たちの意識でもあった。過去の詩人のうち、みずからの祖先となるもの、それらを表章し、発掘し、祖述継承するのが、自覚的な意識であった。そうして、過去の文学では、部分にとどまり、支配的でなかったものを、自己の時代の支配的なものとしたのである。

まずもつとも継承されたのは、杜甫である。杜甫の地位は、唐代自体では、まだ充分に確定しない。宋初でもそうである。北宋の中ごろ以後、王安石、蘇軾、黄庭堅、陸游、それらの大詩人が、批評家としてはこぞって杜甫を顕彰し、実作者としては祖述したことが、今日の文学史が説くような杜甫の地位を、不動にしたのである。^①宋詩の歴史は、ある意味で、杜甫認識、杜甫祖述の歴史である。

杜甫について尊重された唐の詩人は、韓愈であり、白居易であった。ことに韓愈は、唐の詩人のうち、もつとも非美文的な点が尊重された。歐陽修が、まず韓愈を再認識し、その祖述者となったことが、宋の新詩風の発端である。李白の詩の意義もまた、蘇軾により、楊万里により、考えられているようであるが、私にはまだ確実なことがいえない。

また唐以前の詩人では陶淵明である。今日われわれが陶淵明に対してもつ尊敬は、宋人の発掘に負うところが少なくない。蘇軾の発掘は、ことに顕著であり、哲学者朱子も、それにあずかる。

以上のような形で、宋詩は過去の詩の継承である。対蹠的にさえ見える唐詩からも、多くのものを継承する。単に、古詩、律詩、絶句という形式を、唐詩から継承したばかりではない。

にも拘わらず、宋詩と、従来の詩とは、やはり大きくちがったものをもっている。悲哀の止揚の有無である。漢六朝から唐までの詩が果さなかった悲哀からの離脱、杜甫においてさえ困難であったそれを、宋詩は、蘇軾を指導者として、大きく果した。それが差違を生むのである。

このことは杜甫自身の詩と、杜甫を祖述した宋の詩人たちの詩とを、比較することによって、明らかである。^②王安石、黄庭堅、陸游、みな杜甫の真摯さを祖述しても、杜甫の絶望を、必ずしも祖述しない。また、北宋初の過渡期が、しばらく晩唐詩の悲哀を祖述したのは別として、南宋末にはふたたび晩唐詩への郷愁がおとずれるが、それも晩唐詩の繊細さの祖述であり、悲哀の祖述ではなかった。悲哀の遮断がそれまでにあったからである。

悲哀の遮断は、ずっと後代の詩をも、支配する。元、明、清の詩が、唐詩宋詩、そのいずれを祖述すべきかを課題としたことは、すでにのべたごとくである。……中略……平均していえば、唐詩の祖

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

述された時期の方が多い。いな宋詩に対する反撥は、宋代自体でも、その末期には生まれ、再び唐詩に近づこうとする。^③もし宋詩が排他的に祖述された時期を求めるならば、前世紀後半の清朝末年に至って、はじめてあつたといつてよいかもしれない。しかし、元、明、清の詩人のそれぞれが、宋詩の祖述を意識とする、しないに拘わらず、唐以前の詩のごとくには悲哀を歌わないこと、みな宋詩とおなじであるのは、何ゆえか。明の李夢陽らいわゆる「明の七子」は、「理を以つて詩を為す」ものとして宋詩を罵倒し、排他的に唐詩を祖述したが、その彼等の詩にも、悲哀は少ない。唐および唐以前の詩の習慣であつた悲哀への執着が、宋詩によつて遮断されたのちに出た詩人だからである。

〔問一〕空欄AとBに、それぞれ最も相応しい漢字一字の語を記しなさい。ただし、解答用紙にA、Bを記した上で答えること。

〔問二〕傍線①「宋詩の歴史は……杜甫祖述の歴史である」とあるが、宋の詩人たちは杜甫の詩の何を高く評価して祖述したのであろうか。本文を踏まえつつ、さらにあなたの考えも加えて答えよ。

〔問三〕傍線②「王安石、黄庭堅……祖述しない」とあるが、その理由はなぜか。本文を踏まえて答えよ。

〔問四〕傍線③「もし宋詩が……よいかもしれない」とあるが、具体的にはどのような文学活動を指して言ったものか。固有名詞を挙げつつ説明せよ。ただし、この文に言う「前世紀」とは十九世紀のことである。

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

【共通C】（これは研究指導に「石原千秋」

を希望する受験生のための問題です。）

以下に示すのは、夏目漱石『夢十夜』（一九〇八年）の「第一夜」の全文です。

この「第一夜」は、最後に「自分」は「女」に再会できた・できなかった、どちらの解釈も可能です。ここでは「再会できなかった」という立場から、「再会できなかった」という解釈を否定しつつ、「再会できなかった」理由を本文の表現を根拠として挙げながら説明しなさい。

こんな夢を見た。
腕組をして枕元に坐っていると、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪廓の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、唇の色は無論赤い。到底死にそうには見えない。然し女は静かな声で、もう死にますと判然云った。自分も確にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込む様に聞いてみた。死にますとも、と云いながら、女はぼつちりと眼を開けた。大きな潤いのある眼で、長い睫に包まれた中は、只一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。

自分は透き徹る程深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじゃないかね、大丈夫だろうね、と又聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睨たまま、やつぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写つてるじゃありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女が又こう云った。

「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。又逢いに来ますから」

自分は、何時逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それから又出るでしょう、そうして又沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待つていられますか」

自分は黙つて首肯した。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待つていて下さい」と思い切った声で云った。

「百年、私の墓の傍に坐つて待つていて下さい。きつと逢いに来ますから」

自分は只待つていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱した様に、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘つた。真珠貝は大きな滑かな縁の鋭どい貝であった。土をすくう度に、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿つた土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかな土を上からそつと掛けた。掛ける毎に真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾つて来て、かく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちていた間に、角が取れて滑かになったんだろうと思つた。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなった。

自分は苔の上に坐つた。これから百年の間こうして待つているんだと考えながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それが又女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上つて来た。そうして黙つて沈んでしまつた。一つと又勘定した。

自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつとせない程赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいに、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなって丁度自分の胸のあたりまで来て留まつた。と思うと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の薔が、ふつくと綻を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹える程匂つた。そこへ遥の上から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花瓣に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思はず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気が付いた。

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

【共通D】（五味淵典嗣）

○次に示すのは、梶井基次郎『路上』の一節である。ある初夏の日「自分」は、電車の停留場から友人の家に向かう近道を見つけた。それは崖を上り下りする、決して路らしい路ではなかったが、「自分」はその近道を歩くたびに新鮮な気分を味わっていた。以下は、それに続く場面である。文章を読んで、後の問いに答えよ。

それは或る雨あがりの日のことであつた。午後で、自分は学校の帰途であつた。いつもの道から崖の近道へ這入った自分は、雨あがり下りの赤土が軟くなっていることに気がついた。人の足跡もついていないようなその路は歩く度少しづつ滑つた。

高い方の見晴らしへ出た。それからが傾斜である。自分は少し危いぞと思つた。

傾斜についている路はもう一層軟かであつた。然し自分は引返そうとも、立留つて考えようともしなかつた。危ぶみながら下りてゆく。一と足下りかけた瞬間から、既に、自分はきつと滑つて転ぶにちがいないと思つた。――途端自分は足を滑らした。片手を泥についてしまった。然しまだ本気にはなつていなかった。起きあがろうとすると、力を入れた足がまた滑る滑る滑つて行つた。今度は片腕をつき、尻餅をつき、背中まで地面につけて、やつとその姿勢で身体は止つた。止つた所はもう一つの傾斜へ続く、ちよつと階段の踊り場のようななつた所であつた。自分は靴を持つた片手を、靴のまま泥について恐る恐る立ち上つた。――何時の間にか本気になつていた。

誰かが何処かで見ていやすなかつたかと、自分は眼の下の人の方を見た。それらの人家から見れば、自分は高みの舞台で一人滑稽な芸当を一生懸命やつているように見えるにちがひなかつた。――誰も見ていなかった。変な気持であつた。

自分の立ち上つたところはやや安全であつた。しかし自分はまだ引返そうともしなかつたし、立留つて考えて見ようともしなかつた。泥に塗れたまままた危い一步を踏み出そうとした。とつさの思ひつきで、今度はスキーのようにして滑り下りてみようと思つた。身体の重心さえ失わなかつたら滑り切れるだらうと思つた。靴の打つてない靴の底は滑る滑る滑る赤土の上を滑りはじめた。

二間余りの間である。然しその二間余りが尽きてしまつた所は高い石崖の鼻であつた。その下がテニスコートの平地になつてゐる。崖は二間、それ位であつた。もし止まる余裕がなかつたら情力で自分は石垣から飛び下りなければならなかつた。然し飛び下りるあたりに石があるか、材木があるか、それはその石垣の出っ鼻まで行かねば知ることが出来なかつた。非常な速さでその危険が頭に映じた。

石垣の鼻のザラザラした肌で靴は自然に止つた。それはなにかが止めてくれたという感じであつた。全く自力を施す術はどこにもなかつた。いくら危険を感じていても、滑るに任せ止まるに任せる外はなかつたのだつた。

飛び下りる心構えをしていた脛はその緊張を弛めた。石垣の下にはコートのローラーが転がされてあつた。自分はきよんとした。――

何処かで見ていた人はなかつたかと、また自分は見廻して見た。垂れ下つた曇空の下に大きな邸の屋根が並んでいた。しかし廊下として人影はなかつた。あつけない気がした。嘲笑つていてもいい、誰かが自分の今為たことを見てくれたらと思つた。一瞬間前の鋭い心構えが悲しいものに思ひ返せるのであつた。

どうして引返そうとはしなかつたのか。魅せられたように滑つて来た自分が恐ろしかつた。――①破滅というものの一つの姿を見たような気がした。成る程こんなにして滑つて来るのだと思つた。

下に降り立って、草の葉で手や洋服の泥を落しながら、自分は自分がひとりでに亢奮しているのを感じた。滑つたという今の出来事がなにか夢の中の出来事だつたような気がした。変に覚えていなかった。傾斜へ出かかるまでの自分、不意に自分を引摺り込んだ危険、そして今の自分。それはなにか均衡のとれない不自然な連鎖であつた。そんなことは起りはしなかつたと否定するものがあれば自分も信じてしまふような気がした。

自分、自分の意識というものの、そして世界というものが、焦点を外れて泳ぎ出して行くような気持に自分は捕えられた。笑つていてもかまわない。誰か見てはいなかつたかしらと二度目にあたりを見廻したときの廓寥とした淋しさを自分は思い出した。

帰途、書かないではいられないと、自分は何故か深く思つた。それが、滑つたことを書かねばいられないという気持か、②小説を書くことによつてこの自己を語らないではいられないという気持か、自分には判然しなかつた。恐らくはその両方を思つていたのだつた。

(注1) 二間余り……一間は約一・八二メートル。(注2) 廓寥……ひろびろとしたものの寂しいさま。

問一 傍線部①「破滅というものの一つの姿を見たような気がした」とあるが、なぜ「自分」はそう感じたのか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問二 傍線部②「小説を書くことによつてこの自己を語らないではいられないという気持」とあるが、「自分」は「小説」を通じてどのような「自己」を語りたいと考えたのだろうか。本文中の表現を根拠にしながら、あなたの考えを述べなさい。

研究指導	
教員名 ()	
受験番号	
氏 名	

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験 解答用紙

【専門科目】

【国語教育専攻】

大学記入欄

問題番号
選択 ()

